

世界自然遺産 屋久島の自然を思う

松本 毅

屋久島野外活動総合センター代表(鹿児島県)

屋久島に移り住んで14年がたった。東京でサラリーマンをしていた頃には想像もつかないほど多くのことを、屋久島の自然から学んでいる。

筆者が来た当時の屋久島は、世界遺産でもなく、過疎の進む何の変哲もない離島だった。草刈りや刈った草を燃やすことに1日を費やし、海岸に流木を拾いに行ってはそれで五右衛門風呂を炊く、そんな日々を送っていた。大雨や台風に閉じ込められどうにもできなかつたり、壮大な夕日や満天の星空などを見ると、自然に対する脅威の念や畏敬の念が生まれた。都会では接することのできない本物の自然が、ここにはある。

筆者は現在エコツアーの会社で、代表兼ガイドの仕事をしている。それ以前はダイビングショップを6年ほど営んでいた。現在へいたる大変重要なことを学んだのは、その6年間だ。

海が時化れば客の来ない店で海の生物に関する本を読み、海が風れば潜りに行く、そんな日々を繰り返していた。ある時海へ潜ってみると、まさしく本に書いてあった海の生き物たちの営みが、目の前で行なわれていることを実感した。いつも何気なく見ていた決して特別でない生き物たちが、いつしか輝いて見えてきたのだ。

それまでは、沖縄のようにマンタはいない、群れ泳ぐデバスズメもない、餌付けをすればいいべらばかり。そんな屋久島の海をどうPRすればいいのか悩んでいた。しかし、何も特別なものを見せる必要はないのだ。今ここにいる生き物が

そのまま、面白くすばらしいのだ。そのことに気づいた時から、これまでの迷いが吹き飛んだ。

華やかな熱帯魚だけが海の生き物ではない。石の下で蠢く醜い生き物たちだって、長い進化の歴史の中で生き抜いてきた、海の生態系の一員なのだ。昼間はじっと石の下に隠れ、夜な夜な這いまわって生きているもの。また、他の生物の体内に潜り込むもの。捕食者に襲われそうになると内臓を吐き出して、皮一枚で逃げ出してまた再生するもの。みな、我々の想像をはるかに越えた生きる術を身につけ、たくましくそこにいる。

しかし、一方では生まれた瞬間に食べられてしまうことも自らの運命と受け入れ、代わりの生き残った者たちが大量の子孫を産み落とすとしていく。大きな生態系に身を委ねながら、自らの生を淡々と全うしているのだ。そんな彼らの生き様を見ていると、我々人間がい

かに特殊化した生き物であるのか、認識させられる。人間も地球上の生物の一員であると言われるが、本物の自然をじっくり見ていると、我々はかなり異端となってしまったと、つくづく思うのである。

屋久島は、世界自然遺産という肩書きがいま光り輝いている。しかし、そんな人間の価値観を当てはめるのではなく、そこにある自然をそのまま素直に見、受け止めることが大切なのだと思う。屋久島の自然を見つめるとき、まずこのような視点から始めなければならぬのではないかと。

